©日本記者クラブ 2018

日本記者クラブ会報

公益社団法人　日本記者クラブ　〒100-0011　東京都千代田区内幸町2-2-1　日本プレスセンタービル　TEL.03-3503-2722　https://www.jnpc.or.jp/

撮影：津野　義和（ガンマ通信東京支局）

氷上の“絶対王者”　凱旋会見

平昌冬季五輪のフィギュアスケートで66年ぶりの五輪連覇を果たした羽生結弦選手が、帰国の翌日、日本記者クラブ主催の会見に応じた。最後に、恒例の揮ごうについて語る
=2月27日　会見場（5ページに関連記事）

新理事長に原田亮介さん（日経）就任　総務委員長には小松浩さん（毎日）

日本記者クラブでは、今年1月の小田尚理事長の任期途中での退任を受け、2月15日に緊急理事会が招集され、互選によって、日本経済新聞専務執行役員論説委員長の原田亮介さんが新理事長に選出された。任期は、前理事長の残り任期である来年5月まで。

選出後、理事会で原田新理事長は「日本記者クラブは来年創立50周年を迎える。歴史の中に言葉を刻むのがわれわれの仕事であり、デジタル対応も含め、当クラブとしての使命を果たしていきたい」と抱負を述べた。

原田新理事長は新潟県出身で、1981年に日本経済新聞社に入社。社会部、経済部を経てニューヨーク、ワシントンで特派員として勤務。日経ビジネス編集長、金融部長、政治部長などを経て、2016年3月から現職。当クラブでは企画委員（09年3月から12年4月まで）を務め、15年には理事になり総務委員長を務めてきた。

原田氏の理事長選出で空席となった総務委員長には小松浩・会員資格委員長（毎日新聞主筆）が、会員資格委員長には新理事の田中隆之・読売新聞執行役員論説委員長が、それぞれ就任した。

（専務理事　土生修一）

※2ページに新旧理事長のあいさつを掲載しました。

就任にあたって

情報軽視の「庄屋の感覚」から脱皮を

司馬さんの言葉かみしめて

理事長　原田　亮介

作家の司馬遼太郎さんが日本記者クラブで総会記念講演をしたのは1976年のことだった。記者出身の司馬さんらしく、「庄屋の情報を反省する」という演題で、日本人の情報への対処がいかにいいかげんかをノモンハン事件などのエピソードを交えて説いた。

遊牧民は次の居留地に牧草がなければ家畜が死に絶えてしまう、だから偵察＝情報収集は集団の生死がかかった真剣な行為なのである。ところが日本は何が起きても集落共同体で稲作をしていれば基本、食べるに困ることはない、だから「情報が一番大事だという精神の不足が大きい」というのである。

ソ連戦車部隊の攻撃で壊滅した日本の戦車について「とてもダメだ」と少尉が見たままを語ると、大本営詰めの少佐が何も知らないのに「全部嘘である」と断じたという。ことほどさように「情報の前には観察することがあり、観察する前には観察するに耐える知性と度胸のようなものを養う必要がある」。

日本記者クラブの理事長に就任するにあたり、この話を思い出したのはジャーナリズムの役割と本質を言い当てているからだ。工業化で「日本が一番、情報を必要（中略）、稲作の庄屋さんの感覚ではどうしようもない」。

司馬さんの講演から42年がたつ。もちろん当時は想定もしなかった課題に、私たちは直面している。デジタル化が組織ジャーナリズムの基盤を掘り起こしかねない。だが、私は楽観的だ。どんなに米国のプラットフォーム企業が隆盛を誇ろうが、一次情報を取材し、正確に報じられるのはプロである記者しかいないからだ。そのために司馬さんの厳しい言葉をかみしめたい。皆さんのサポートをお願いいたします。

（はらだ・りょうすけ　日本経済新聞社専務執行役員論説委員長）

＊司馬さんの講演録はクラブのウェブサイトで入手可能です。

退任にあたって

記者クラブの使命と機能

小田　尚

日本記者クラブの使命は、正確でバランスの取れた情報発信の場となるとともに、現役記者の取材技術を向上させる「記者ゼミ」を提供するところにあります。

原田亮介新理事長の下で、こうした機能にますます磨きが掛けられることを祈ってやみません。今年は、北朝鮮情勢や憲法改正論議などをめぐって、積極的に記者会見や勉強会を開くことになるでしょう。皆さまの一層のご協力をお願いします。

突然、「一身上の都合」により、理事長を退任し、皆さまにご迷惑をお掛けしました。国会同意を伴う人事の候補となったため、そうした表現にならざるを得ませんでした。

理事や会員、事務局の方々には本当にお世話になりました。ありがとうございました。

（読売新聞東京本社調査研究本部客員研究員）

●**第611回理事会**（2・15　Cホール）

①読売新聞社の小田尚前理事長から田中隆之同社執行役員論説委員長への理事交代を承認した。②理事長に日本経済新聞社の原田亮介理事を選定した。③原田新理事長が、総務委員長を毎日新聞社の小松浩理事に、会員資格委員長を田中理事に委嘱した。

出席　原田理事長、近藤、荒木の両副理事長、土生専務理事、西村、小松、田中、小林（毅）、渡邊、石杜、深田、後藤、林、堅田、友安、加藤、袴田、篠塚、吉次、小林（幹）、西野、富田、の各理事、宮田、三木の両監事。

●**第390回会報委員会**

（2・8　小会議室）

3月号の編集について協議した。

出席　小林委員長、梅原、高橋、勝沼、草間、仙石、大寺、小池、長友の各委員。

●**第482回企画委員会**

（2・15　会見場）

今後のゲストについて検討した。

出席　西村委員長、上田、倉重、坂東、橋本、今井、別府、小川、榊原、杉田、川上、山田、木村、友安、瀬口、宮内、島田、出川、小栗、川村、平井、福田、橋場の各委員。

●**第486回会員資格委員会**

（2・16　小会議室）

新委員長の田中氏が挨拶し、3月1日付入退会を審議、理事会に答申した。

出席　田中委員長、栗原、海保、越中、石井、根本、井上、神田、青木の各委員。

「ペンタゴン・ペーパーズ 最高機密文書」

2月7日(水)、スペースFS汐留で日本記者クラブ会員向けに特別試写会が開催され、約250人が参加した。

スクリーンからインクの匂いが漂ってきそうな「紙の時代」の新聞の、勇気と連帯の物語。試写終了後に拍手がわいたのも納得の出来栄えだ。

スクープしたニューヨーク・タイムズではなく、抜かれて追いつくワシントン・ポストを主役にしたのが良かった。屈辱をバネにする記者たちを縦糸に、女性経営者グラハムと編集主幹ブラッドリーの男女を超えた友情を横糸に、映画は「国益とは何か」「誰がそれを判断するか」を鋭く問う。

この「国家vs新聞」の闘いが新聞の勝利に終わった史実は誰もが知るが、マクナマラが20年間にわたるベトナム関与政策失敗の経緯を文書にまとめるよう指示したことは、正当に評価されるべきだと思う。少なくとも彼は、歴史の法廷からは逃げなかった。

●「紙の時代」新聞の勇気と連帯の物語

記録を残した政治家。報道の自由に軍配を上げた司法。危険を顧みず内部告発したエルズバーグ。タイムズ1紙の闘いにせず隊列に加わったポストや各紙。どれが欠けてもペンタゴン・ペーパーズをめぐる物語は完成しなかった。輝いていたのは新聞というよりも米国の民主主義。トランプ政権へのただのあてこすり映画ではない。

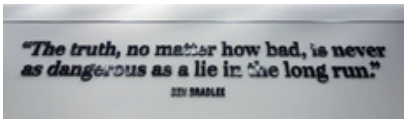
今なら内部告発者は文書をまずネットに流すかもしれないし、新聞の結束にも疑問符がつく。だが、真実を明るみに出すため勇気を持って粘り強く仕事する新聞の役目はいつの時代も変わらない。この映画に心を揺さぶられない記者は一人もいないだろう。

毎日新聞社主筆　小松　浩

●クラブ訪米団が映画化の情報入手

「実はあのスピルバーグ監督がワシントン・ポスト紙とペンタゴン・ペーパーズを題材にした映画を撮っているんだ」―。昨年9月、クラブ訪米団をポスト紙本社に迎え入れ、それまで淡々と編集局内を案内してくれていたキャメロン・バー局長が急に冗舌になった。

編集局中心部の壁に飾られたベン・ブラッドリー氏の名言「中身がどれほどひどくても、真実は、長い目で見ればウソほど危険ではない」＝写真＝を前に、しばし同氏の武勇伝を披露した後のこと。聞けば、同氏はトム・ハンクス、キャサリン・グラハム氏はメリル・ストリープという2大名優が演じるという。バー氏は「どれほど本物に似るのかな」と、やや心配している風でもあったが、どうして、どうして、完成した映画の2人は写真に残るイメージそのままだった。



ポスト紙は2013年、ネット通販大手アマゾン・ドット・コム創業者のジェフ・ベゾス氏に2億5000万ドルで買収され、グラハム家の家族経営は終わった。本社も、かつての場所から数ブロック離れた瀟洒なビルに移転し、映画に漂った活版とインクの匂いは影も形もない。そして、デスク陣から記者まで、新経営方針「デジタル・ファースト」を口にする。

変わらないのは、真実を追求し、ホワイトハウスを頂点とする権力のあり方をチェックし続けようとする使命感だろう。今のホワイトハウスの主は、ブラッドリー氏の言葉をどう受け止めるだろうか。

読売新聞社調査研究本部　大内　佐紀

© Twentieth Century Fox Film Corporation and Storyteller Distribution Co, LLC. 3月30日(金)全国公開

24ページに関連記事

クラブゲスト　4
メルジャン・駐日トルコ大使／安井明彦・みずほ総合研究所欧米調査部長／グリムソン・北極サークル議長／ソイニ・フィンランド外相／カッカティル・国連合同エイズ計画ドナー関係・パートナーシップ局長
会見リポート　5〜9
羽生結弦・フィギュアスケート選手・平昌五輪金メダリスト
「憲法論議の視点」宍戸常寿・東大教授、只野雅人・一橋大教授
「朝鮮半島の今を知る」木村幹・神戸大大学院教授、李鍾元・早大大学院教授
バズビー・AP通信社上席副社長・編集主幹
原晋・青山学院大陸上競技部監督
栃ノ心、ツィンツァゼ・駐日ジョージア大使
高橋シズエ・地下鉄サリン事件被害者の会代表世話役、河原理子・朝日新聞社会部記者
第5期記者ゼミ　9
福島第一原発取材団報告　10〜11
福島取材団報告　12〜13
特集「3・11から7年」　14〜17
ワーキングプレス　18〜19
平昌五輪　共同通信社　長尾一史
コインチェック問題　NHK　山口学
新・列島報告　福井県　20
大雪対応　激動の10日間　福井新聞社　安達洋一郎
リレーエッセー　21
版画家・斎藤清さん　福島民報社　高橋雅行
書いた話書かなかった話　22〜23
東欧革命後の混乱取材　岡田実
マイBOOKマイPR　24
写真回廊　26

下記のゲストの会見リポートは
5～9ページに掲載しています

羽生（はにゅう）　結弦（ゆづる）　フィギュアスケート選手 平昌五輪金メダリスト

■2・27（火）記者会見／司会：島田敏男委員／出席：240人／会見詳録

宍戸（ししど）　常寿（じょうじ）　東京大学教授

■2・13（火）「憲法論議の視点」①「総論」／司会：川上高志委員／出席：103人

只野（ただの）　雅人（まさひと）　一橋大学教授

■2・19（月）「憲法論議の視点」②「憲法改正の国民投票」／司会：土生修一専務理事／出席：96人

木村（きむら）　幹（かん）　神戸大学大学院教授

■2・1（木）「朝鮮半島の今を知る」①／司会：五味洋治委員／出席：83人

李鍾元（Lee JongWong）　早稲田大学大学院教授

■2・16（金）「朝鮮半島の今を知る」②／司会：五味洋治委員／出席：85人

サリー・バズビー　ＡＰ通信社上席副社長・編集主幹

■2・6（火）記者会見／司会：杉田弘毅委員／通訳：池田薫／出席：57人

原（はら）　晋（すすむ）　青山学院大学陸上競技部監督

■2・5（月）記者会見／司会：竹田忠委員／出席：89人

栃ノ心（とちのしん）　大相撲初場所優勝
レヴァン・ツィンツァゼ　駐日ジョージア大使

■2・14（水）記者会見／司会：小栗泉委員／通訳：吉國ゆり／出席：62人

高橋（たかはし）　シズエ　地下鉄サリン事件被害者の会代表世話役
河原（かわはら）　理子（みちこ）　朝日新聞社会部記者

■2・21（水）「被害者報道を考える」①／司会：瀬口晴義委員／出席：89人

会見余話

●ムーミンの質問に外相が名回答

大学入試センター試験でフィンランド人作家・トーベ・ヤンソンが書いた「ムーミン」が出題され、物語の舞台をめぐる論争が起きた。2月21日の同国のソイニ外相の会見でも「ムーミンはフィンランドの住民？」との質問が出た。

外相は「良い質問だ。ムーミンはフィンランドにいる」と笑顔で答え、胸に手をあてて「私たちの心の中にいる。日本の方々の心の中にもあるとうれしい」と回答した。

同国大使館のツイッターには「私の心の中にもいる」「外相の回答、粋です！」とコメントが寄せられ、「いいね」が1日で4400を超えた。

ハサン・ムラット・メルジャン　駐日トルコ大使

大使は、産業工学専攻の大学教師から政治家に転身。与党・公正発展党（ＡＫＰ）の創設メンバー。エルドアン大統領は独裁色の強いこわもてイメージだが、大使は、「メディアと友好的に意見交換したい」と対話重視を強調した。会見後に大使館の協力でトルコの食べ物、飲み物を楽しむ懇親会も行われた。

■2・7（水）囲む会／司会：土生修一専務理事／通訳：大野理恵／出席：61人

安井（やすい）　明彦（あきひこ）　みずほ総合研究所欧米調査部長

「高い株価はトランプにとって最大のプライド。保護主義政策が株価を下げれば（保護主義見直しを）考慮するだろう」「トランプはブラックホールのような存在。近づきすぎると吸い込まれ周りが見えなくなる」と現政権の「向こう側」を注視すべきと指摘した。

■2・9（金）「トランプ政権１年の評価」②／司会：杉田弘毅委員／出席：46人

オラフル・ラグナル・グリムソン
北極サークル議長（前アイスランド大統領）

同サークルは、大統領時代に「北極版ダボス会議」を目指し設立。北極圏は近年、温暖化による海氷溶解で北極海航路の利用が拡大している。「天然資源に富む北極圏開発はこの10年で驚異的に進展、中露は積極的に関与している。日本もぜひ参加してほしい」

■2・13（火）記者会見／司会：脇祐三会員／通訳：池田薫／出席：35人

ティモ・ソイニ　フィンランド外相

結成に参加した政党が「極右」と批判されているが、「ヘイトスピーチで社会の分断をはかる悪い連中とは違い、われわれは既得権と闘う良いポピュリズム」と説明。また「ＥＵ経済で、大国が小国の銀行を支配すれば反発を招き大混乱になる」と警告した。

■2・21（水）記者会見／司会：鶴原徹也委員／通訳：森岡幹予／出席：53人

プラディープ・カッカティル
国連合同エイズ計画（UNAIDS）ドナー関係・パートナーシップ局局長

「2030年にエイズ終結を目指す。勝てると思うが脅威が去ったわけではない」。急きょ帰国したシディベ事務局長の代理で会見し、エイズ対策について語った。「教育・啓発は非常に重要な対策。2020年東京五輪も大事な機会」。また東京に戻ってくる、と笑った。

■2・22（木）記者会見／司会：宮田一雄会員／通訳：池田薫／出席：18人

羽生　結弦

フィギュアスケート選手　平昌五輪金メダリスト

完璧！　隙のなさに脱帽

いい会見だった。約8年、企画委員として主にスポーツ関係のクラブの会見に関わったが、これほど完璧な登壇者は見たことがない。玉石混交の質問の全てを拾い、堂々、当意即妙の受け答えで宝石のごとくに光らせた。

会場を俯瞰していた事務局スタッフによると、満場の記者、OBらは羽生の一言一言に一斉に顔を上下に動かし、うなずいていたという。スタンドの観客を自らの世界に引き込む氷上の演技、そのままである。

司会は海千山千のNHK、島田敏男氏。顔も体も幅は半分しかない羽生が大きく見えたのは、その存在感ゆえだろう。座っているだけでオーラを感じたのは、おそらく長嶋茂雄さん以来である。しかもこちらは、語彙に破綻がない。

あまりの隙のなさに、「怖いくらい」「地に足のついた妖精」の感想も聞いた。フリー演目の陰陽師に照らせば、リンクを降りても魔物のごとく、だったかもしれない。

例えば演技後、リンクに大量に投げ込まれた、プーさんのぬいぐるみの行方を問われると、「森に帰りました」と会場の笑いを誘う。「すごく好きな言葉で、一番のファンタジー」と続けながら、これで終わらない。「リアルに言えば、大金払って現地まで来てくださり、高いチケットを入手していただいている。そうしたお金が飛んでいる。経済が回っているなら、それで十分です」

「夢」を語ってよどみない人生論。感謝の心から入る日本人としての誇り。今後挑戦する4回転半や5回転ジャンプには、「もし羽生結弦が跳ぶなら、確実に表現の一部として跳ぶ。それが僕のスタイルですから」と揺るぎない競技観。世界の第一人者としての孤独と、その克服。とてもここには書ききれず、いち早い全文の起こしを事務局に願う。

質問が事前に提示されたとして、回答原稿を準備しろといわれても、こうは書けない。脱帽である。

そして4年後の北京五輪については「もし出るなら、絶対に勝ちたいと思っています」と言い切った。

会場には、中国大使館からパンダのぬいぐるみも届いたのだという。「北京もよろしく」ということだろう。ここで心配になったのは、再びプーさんの行方である。中国では、プーさんが習近平国家主席と似ているとして風刺に使われ、画像が統制対象となっている。2022年は習体制2期目の終盤にあたる。羽生ファンの象徴であるプーさんは、北京に受け入れられるだろうか。

企画委員　産経新聞社特別記者　別府　育郎

世間知ある社会派の一面も

会見前の控室で羽生選手と雑談。「以前からニュースに関心があり、よく見ています。五輪関連で北朝鮮について聞かれた時は問題の重さが分かるので返答に困りました」と国際問題への関心を披歴した。

会見では仙台のパレードへの期待を聞かれると、大きな声で「仙台におカネを落としてください！」と意外な回答。「パレードには費用がかかり、特別な支援があることを知っているからです」

追いかけまわすメディアにウンザリかと思ったら、「幸いにも10歳ごろからインタビューを受けてきたおかげで、自分の思考を整理したり、新しい言葉も覚えた。そうやって自分を作ってきたし、作られてきた」と、記者がグッとくる自己分析も。

「浮世離れした優等生的王子サマ」の先入観があっただけに、世間知ある社会派の一面を知り驚いた。

エレベーターの中で「お酒は飲むんですか？」とそっと聞いてみた。「体質的に飲めないんです。でも、まったく必要ないです」ときっぱり。なぜかこちらは自らを恥じて、小さくうなずくしかなかった。

専務理事　土生　修一

憲法論議の視点

視座を熟考する機会に

宍戸常寿
東京大学教授
2月13日

只野雅人
一橋大学教授
2月19日

施行から70年余を迎えた日本国憲法を改正する初めての国民投票に向き合うことに〝なるかもしれない〟という歴史的な地点に今、私たちは立っている。

改憲論議は安倍晋三首相がアクセルを踏み込む形で進んでいる。自民党が目指す今年中の国会発議に至るのかは現時点では見通せない。だが国会の議論がヒートアップする前に憲法とその改正の意味を整理しておきたいとの狙いから「シリーズ研究会・憲法論議の視点」を企画した。

考えたポイントは二つある。一つ目は政党の議論に縛られず、幅広い観点を取り上げることだ。全5回の研究会は「総論」から始め、「国民投票」「9条」「新しい人権」「統治機構」と網羅的なテーマ設定とした。

二つ目は、40代を中心に気鋭の憲法学者をゲスト講師に招くことだ。大御所による「太平洋の両岸から弾を撃ち合う」ようなかみ合わない議論は避けたい。論点を整理し、報道に当たっての視座を熟考する機会となる研究会にしたいと考えた。

初回の「総論」には100人を超える方に参加していただき、関心の高さを裏付けた。宍戸常寿東大教授の濃密な問題提起は、短い時間の中で憲法全般に触れてほしいという難しい要望に応えるものだったと思う。宍戸氏は憲法改正の意義から憲法典と付随法の関係などの基本的な論点整理の上に、自民党が改憲を目指す4項目などへの具体的な言及、メディアへの注文までを整理。有意義な改憲論議の条件は「憲法現実の何を具体的に確認・変更するのか、しないのかを明らかにすることだ」と指摘し、「国民が『真意』に基づく投票行動ができるよう、社会全体で質疑・討論を尽くすべきだ。賛成・反対の判断の対象・帰結を明らかにする報道が求められる」と提起した。

2回目は只野雅人一橋大教授に「憲法改正の国民投票」を解説していただいた。只野氏は国民投票を国会審議までを含めた「代表民主制のプロセス」として捉えることが重要だとし、「議員同士の有益な討論がほとんどない国会論議にもっと批判的な目を向けるべきだ」と語った。

実際に国会発議が行われた時、どう報道するのかは非常に難しい課題だと考えている。国民投票は改正案に賛成か反対かの意思表示しかできない。しかし多くの国民の意識はその中間で揺れ動くだろう。宍戸氏は「ネットや会員制交流サイト（SNS）との比較でメディアの社会的存在意義が問われる」と指摘し、メディアのアクセス権と反論権、広告の扱いなどを今から検討するよう求めた。

初めて経験する改憲報道に向けて、研究会が論点を突きつめて、整理する機会にしていただければと思う。

企画委員　共同通信社論説副委員長
川上　高志

今後の予定
▼青井未帆・学習院大教授と井上武史・九州大准教授との対談「第九条」
3月12日(月)14：30～16：30
▼山本龍彦・慶応大教授「新しい人権（プライバシー、AI、環境権など）」
3月15日(木)14：30～16：00
▼曽我部真裕・京都大教授「統治機構」
3月20日(火)13：30～15：00

朝鮮半島の今を知る

直視すべき隣国の変化

日本の外交・安全保障を大きく左右する隣国について、いまだに旧態依然としたステレオタイプがまかり通っている―。

「朝鮮半島の今を知る」というテーマを設定した企画委員の思いは、そんなところではなかろうか。朝鮮半島を担当する記者の間では状況変化への認識が共有されつつあるものの、日本メディア全体での認識となると心もとないからだ。

木村幹神戸大大学院教授は日韓関係、李鍾元早稲田大大学院教授は南北関係を主軸に韓国社会の「今」を論じた。

共通するのは「時代が変わった」ということだ。

まずは木村氏の取り上げた日韓関係を考えよう。

韓国における日本の存在感は1990年代以降、低下し続けてきた。いまや「反日」が政治的効果を持つような時代ではない。

李明博大統領（当時）が２０１２年に竹島へ上陸した時には支持率が数ポイント上がったが、３週間後には元に戻っていた。その傾向はさらに強まっており、今では対日外交が支持率に与える影響は「観測不能なレベル」（木村氏）になった。

文在寅政権はその流れの中で、対日外交の展望を描く努力すらしていない。木村氏が「場当たり的」と評する文政権の姿勢は、対日外交の重要度低下を見せつける。

慰安婦問題への対応が典型的だ。文大統領は２０１５年の日韓合意では解決していないと主張する。そして日本政府のさらなる謝罪を期待すると語りつつ、再交渉の要求はしないとも口にする。冷静に見れば文政権としての「見解表明」にすぎず、新たな対日要求ではない。

木村氏は「さらなる外交努力をするつもりはない」という宣言だと喝破する。解決へ向けて動くべきは日本政府だという「丸投げ」だが、それでも運動団体の外に不満が広がるような事態にはなっていない。それが「今」の韓国社会の現実だ。

李鍾元氏が取り上げた韓国社会の北朝鮮観も、日本では十分に理解されていない。

李氏が紹介したソウル大の世論調査で興味深いのは「なぜ統一が必要か」という質問である。07年には「同じ民族だから」が50・7％だったが、16年には38・6％。逆に「戦争の危機をなくすため」が19・2％から29・8％になった。

民族を理由にする模範解答より、脅威を取り除くという実利への傾斜だ。07年に11・8％だった「統一より現状維持」という人が16年には23・2％になってもいる。「最前線のリアリズム」（李氏）が示す安定志向だと言えるだろう。

こうした隣国の変化を日本メディアはきちんと伝えられているか。常に自省する姿勢が求められる。

毎日新聞社論説委員（前ソウル支局長）　澤田　克己

木村幹
神戸大学
大学院教授
２月１日

李鍾元
早稲田大学
大学院教授
２月16日

サリー・バズビー
AP通信社上席副社長・編集主幹

AP、事実確認で信頼獲得

トランプ時代に生きる米メディアの闘いを間近で聞いた。その中でも通信社論を紹介したい。

CNNが24時間ニュースを流し、重要イベントを中継する時代に、「通信社の役割は何か」という問いが会場から出た。

さて彼女はどう答えたか。

「この10年間で一番うれしかったのは」と切り出したのは、歌手のマイケル・ジャクソンが死亡した時の報道だった。２００９年６月25日、ジャクソンがロサンゼルスの病院で死亡した、との情報が流れ、世界中のテレビが報じ、アクセスでパンクするウェブサイトもあった。

しかし、世界はまだ「死んだらしい」という、フワフワした不確かな情報に接していただけだった。その頃、歌手、俳優ら芸能人取材をAPなどの硬派メディアは先頭で行わないという慣習もあった。

だが、ジャクソンは、世界的なポップスターだ。その死は大ニュースだからということで、APが病院や親族から「死」を確認して速報した。すると、ようやく米国も世界も「ポップの王様、マイケル・ジャクソンが死んだ」ことを「事実として受け止めた」という。APが報じて初めて歴史の事実になったというわけだ。「信頼されているからよ」と彼女は付け加えた。

確かにAPの印象は「間違えない」だ。右でも左でもない。だから記事はいわゆるセクシーでない。だけど信頼できる。

思い出すのは、米国中のメディアが間違えた２０００年の米大統領選だ。フロリダ州の開票結果を巡って混乱したこの選挙は、投開票日から翌日にかけて「ゴアだ」「ブッシュだ」と誤報が続いた。日本メディアも引きずられた。

だが、APだけが全米に張り巡らせた支局から上がってくる実票を基に「まだ打てない」と踏みとどまった。「共和党も民主党もデジタルメディアもAPを信用している」とバズビー氏は誇らしげに語った。

企画委員　共同通信社論説委員長　杉田　弘毅

原　晋
青山学院大学陸上競技部監督

旧態依然の組織に発展なし

スポーツの問題で、これほど明確に、そして具体性をもって、中から改革を求める会見も珍しいのではないか。しかも、覇者が行った会見で。

大晦日のテレビといえば紅白歌合戦だが、では正月のテレビはというと、今や箱根駅伝の中継になるだろう。往路と復路で2日間、それぞれ7時間前後の生中継が行われ、関東では30％近い驚異的な視聴率をたたき出す。その箱根駅伝に新風を巻き起こし、4連覇を成し遂げた青山学院大学の原晋監督。

会見で最も力が入ったのは、箱根駅伝の全国化問題。「箱根駅伝は、今や長距離界の宝」。だが、参加できるのは主催団体の関東学生陸上競技連盟に加盟している大学のみ。つまり地方の大学は参加できない。人口減少で学生が減る中、陸上競技の裾野を広げるためには、全国化して地方に門戸を広げるべきで、旧態依然の組織のままでは発展はないと危機感を表明。

実はその原監督、青学に来るまで「指導実績も華々しい競技実績もなし」。営業マンとしてのビジネス経験こそが選手の指導・育成の原点という、自称〝異端児〟。選手育成の秘訣は、「社会の中で通用する人材をどうやって育てるか。スポーツを通して学べるものは何か」という視点。その背景には監督自身が、実業団の選手を引退したとき、陸上をやってきて何か社会に生かせるものがあるかというと、何も見つからなかったという反省がある。

改革の訴えは、実業団の移籍問題にも及ぶ。実業団ではチームの部長や監督のハンコがないと、選手の移籍が認められない場合が多い。もっといい監督のもとで指導を受けたいと選手が思っても、ハンコを押してもらえず、囲われている実情があると指摘、指導者が勉強し合って、選手をどうやって伸ばすかを競い合わないと将来はないと訴えた。スポーツでも大学でもビジネスでも、組織の問題に悩める人に必見の1時間。

企画委員　NHK解説委員　竹田　忠

栃ノ心
レヴァン・ツィンツァゼ
駐日ジョージア大使

ジョージア、初優勝で認知度急上昇

日本から直線で約8000キロも離れたジョージアに、親しみを感じる人は多くいないだろう。遠い異国の認知度を上げたのが、1月の大相撲初場所で初優勝を遂げた栃ノ心関だ。

初土俵から12年要した。小結まで昇進した後に右膝に大けがを負って入院し、番付は月給が支給されない幕下までみるみる転落。体もプライドも傷つきながら地道にリハビリや稽古に励み、幕内まで返り咲いた。「本当にやめなくてよかった」。乱れた服装で門限を破ったこともあるが、飾らず、実直に振る舞う現在の姿は「日本人以上に日本の心を持ってほしい」という願いが込もったしこ名にふさわしい力士だ。

生い立ちや国柄にも注目が集まった。旧ソ連で元チャンピオンだった祖父にサンボの手ほどきを受け、柔道は少年時代に国際大会の表彰台に上がったレベル。相撲にも「スポーツ選手の気持ちは生かせている」と胸を張る。出身地の古都ムツヘタでは大半の家で自家製ワインを製造し、「売ったりせず、ほとんど自分で飲んでいる」とか。

この日の記者会見に同席した駐日大使はジョージアの紹介で熱弁を振るった。「首都のトビリシにも温泉があり、25のスパリゾートがある。日本からの観光客増大や製品の輸入も期待したい」。アピールの場をつくった栃ノ心関には観光名誉大使の証明書を贈っただけでなく、勲章の授与が決まったことも明かした。

さらなる発信力アップの期待も込め、大使に「ごく短い間に大関、横綱として成功を収める」とエールを送られると、栃ノ心関は「あんまり期待されるとどきどきする」と苦笑い。三役復帰が確実となる3月の春場所に向けては「もっと頑張らないと、とは思っている。大関になるとかじゃなくて、自分の力をつけて自分の相撲を取れるように頑張りたい」。周囲の喧噪をよそに、地に足を付けた抱負を述べた。

時事通信社運動部　大野　周

高橋　シズヱ
地下鉄サリン事件被害者の会代表世話役

河原　理子
朝日新聞社会部記者

研究会「被害者報道を考える」
体験通じ課題指摘

神奈川県座間市で９人の遺体が見つかった事件では、被害者報道のあり方が問われた。実名か匿名か。顔写真を載せるか。遺族らにどう接するか―。研究会は、記者やデスク、キャップたちが、多忙と疲労の中で抱いた悩みから始まった。

一回目に登壇した高橋シズヱさん（右）は、地下鉄サリン事件で夫を亡くし、直後のメディアスクラムの怖さを明かした。葬儀、事情聴取、初めてのことがどっと押し寄せて戸惑っているのに、自宅に記者とカメラが集まり、帰れない。「記者たちは、私の生活を邪魔する存在だった」

「突然、今の気持ちを、と聞かれても答えられない。間違った情報の拡散を防ぐために、正確な報道をしてほしいのに」。ほとんどの遺族が、記者に初めて会う。丁寧に接してもらいたい。取材意図を「事件の風化を防ぐため」と言われても、遺族は何年たっても、事件は昨日のことのよう。「被害者に向かって、風化と言わないで」とくぎを刺した。

時間がたっても、話したいことがあっても、出会いがスクラム状態では、遺族らは記者が怖い。被害者取材の経験が豊富な河原理子さんは、社内や業界で研修会を開き、事件当事者の体験を聞いた上で、対応を議論することが大事と強調した。

被害者の匿名と実名に分かれた過去の事件で、河原さんは匿名の紙面の方に、冷たさを感じたという。高橋さんは「遺族はそう思うかしら？」と疑問を投げかけた。書く側と書かれる側の違いをにじませた。

これからも事件や事故が起きれば、私たちは遺族を割り出し、家へ行く。行けと言う。入り口に立たないと、何も分からないから。ただそのとき、遺族らの心情に少しでも思いが至れば、取材や掲載の姿勢が、何か変わってくるはずだ。

東京新聞社会部警視庁キャップ　大野　孝志

誰でも調査報道

■第13回：訴訟に備える③

2・1（木）講師：植松正史・日本経済新聞社法務報道部／出席：18人

◎取材トラブルから学ぶ

成功より失敗から学べるのではないか―。第13回のゼミはそんな狙いで開かれた。社会部で検察担当だった講師は、取材先との過去のトラブルを赤裸々に振り返り、取材のあり方や訴訟対応について刺激的な議論も交わされた。

いわゆる夜回りで取った話をもとに書いた記事について、裁判所は「真実性や真実相当性を認めることはできない」と判断したという。講師は今、当時の取材が不十分だったと率直に認める。では、なぜ書いたのか。普段口の堅い取材先の積極的な対応が大きな理由だった。だが、夜回りでのネタ元の断片的な言葉は、担当記者としてはピンときても、裁判になるとほとんど説得力がなかったという。「サツ官ならイエス」は通用しないのが現実のようだ。

情報をあてた相手の顔色の変化から「これは間違いない」と思い込んでいたことがなかったか。わが身を振り返って反省することしきりだ。

西日本新聞社東京支社報道部　伊東　秀純

IT講座

■第14回：ショート動画

2・8（木）講師：高橋俊輔・元NHKディレクター（株）Viibar動画メディア事業部執行役員兼プロデューサー／出席：24人

◎求められる「短さ」と「テンポ」

SNS時代の報道に求められる動画とは何か。講師の高橋さんが推奨するのは視聴時の脳のモードの違いを踏まえた作り分けだ。見る意思を持ってTVやPCの前にいる人と、空き時間にスマホでSNSをチェックしている人ではモードが全く違う。動画の主戦場がスマホである以上、短くまとまったテンポの良い映像であることが何より重要になる。

驚いたのがデータで示されたユーザーの飽きっぽさ。1分見続けてもらえるのはまれで、SNSユーザーが視聴を見極める時間は1・7秒だという。山本智さん（NHKネットワーク報道部）は8分超の素材を1分にリメイクして爆発的に拡散した例を示し「テレビ局が培ってきた思考回路やセンスはむしろ足かせになるだろう」と指摘した。

〝報じるべきもの〟と〝見られやすいもの〟のギャップに葛藤も生じてくる。動画で収益確保する道も見えず、当面は暗中模索が続きそうだ。

毎日新聞社写真映像報道センター記者　加藤　隆寛

福島第一原子力発電所取材団
（2.6～2.9）

事故から7年　見通せない廃炉

東京電力福島第一原発の事故から7年。日本記者クラブの福島第一原発取材団は4回目となる今回、原発構内のほか、大量の除染廃棄物を30年間貯蔵する「中間貯蔵施設」などを総勢38人で訪ね、復興の現状を見た。

「廃炉に向けた準備をしていた7年だった」と、東電廃炉カンパニーの大山勝義リスクコミュニケーターは言った。原発構内を回ると、地表は一面、モルタルで覆われていた。地中からの放射線を遮蔽し、敷地の95％で一般作業服での作業が可能になった。

しかし、その先は見通せない。

林立する汚染水貯蔵タンクは現在、約850基。すでに約85万トンの汚染水がたまっていた。原子炉建屋への地下水の流入は依然、止められず、汚染水は増え続けている。流入を止めないと、廃炉作業に入れない。

肝心の廃炉も「定義」が、むしろあいまいになってきている。経済産業省と東電がつくる廃炉の「ロードマップ」では、当初あった施設の解体計画が、いまは消えている。

「どこまでするのか。地元や国民と協議していきたい」と、大山さんは話した。廃炉とは溶融燃料を取り出すことか、更地にすることか――。いずれにせよ、道のりは果てしなく長い。

大熊町と双葉町にまたがる「中間貯蔵施設」では、除染廃棄物の搬入が少しずつ進んでいた。総面積は約16平方キロ。その8割を占める民有地のうち、ようやく63％を取得した。

環境省福島環境再生本部の小沢晴司本部長は「地権者にとって土地を提供するのは、先祖からの歴史を打ち切るということ」。取得交渉はそれだけに難航した。福島県内から出る除染廃棄物は、推計で最大2200万立方メートル。昨年末時点の搬入量はまだ、その2％にも満たない。

今回、一番驚いたのはJR富岡駅前の変貌ぶりだ。津波で大破した駅舎は建て替えられ、駅前商店街は、ほぼ跡形もない。整備された駅前に立つ「富岡ホテル」に1泊した。

社長の渡辺吏さん（58）は商店街で食料品店を営んでいた。ホテル開業は「復興のためですか」と尋ねると、「自分たちの将来のことを考えた」と答えた。それこそが、復興への道だろう。

企画委員　朝日新聞社編集委員　上田　俊英

2号機（左）の開口部に構造物を、3号機の吹き飛んだ上部にカバーをとりつけている。まだ燃料取り出しの準備段階だ

課題山積の事故処理現場

がれき撤去作業中の1号機（奥）と排気筒（手前）

すれ違う作業員と車の数が、1年前に比べて明らかに減った。昨年に続き、取材に入った東京電力福島第一原発。大型休憩所のコンビニも客はまばらで、世界最悪レベルとなった事故現場は一見落ち着いている。

しかし、1～4号機を見渡せる高台では、持参の線量計の数値が毎時100マイクロシーベルトを超え、警告音が止まらない。水素爆発で屋根が吹き飛んだ1号機上部には、大量の鉄骨やコンクリのがれきが山積みのままだ。真ん中部分で支柱の破断や損傷が複数ある1、2号機排気筒（高さ120メートル）は、遠目にもサビが目立つ。

排気筒解体には超大型クレーンを導入予定だが、建屋横のスペースが手狭で制約が多い。解体とがれき撤去はいずれも大型クレーンが複数台必要となるため、同時に作業を進めることは不可能だと確信した。

原子炉建屋内の放射能汚染は深刻で、今も容易に入れない。政府や東電は「廃炉」と呼ぶが、イチエフでは事故処理が静かに続いている。

東京新聞社会部　小川　慎一

原発事故の罪深さ実感

福島第一原発を取り囲む中間貯蔵施設の広大な敷地。1600㌶、東京ドーム342個分。「中間貯蔵は必ず必要。施設が必要」と皆分かっているが、土地を追われる住民の身になればそう簡単ではない。用地買収は困難を極めた。高線量地域にあるため外に持ち出せず、1個1個全て国が買い取ることになる。「これは俺が作った」ドア1枚、ブロックの石、庭木1本まで住民の思いが詰まっている。現在、1100㌶の用地は確保したという。

3年前から除染作業で出た汚染土などの運び込みは始まっていて、この日もひっきりなしにダンプカーが走る。しかし、この施設は「中間」であって「最終」ではない。最長で30年間保管するだけ。「最終貯蔵施設」はいつ、どこに作られるのか。先送りにされた決断は、誰が、どうやって下すのだろうか。原発事故の罪深さを改めて感じさせられた。

テレビ朝日社会部　神保　修麻

まだまだ遠い復興

国道から1本入った、中間貯蔵施設予定地には、家並みも店舗もそのまま残っていた。今なお帰還困難区域となっているその地に、確かに人々の営みがあったことを実感した。

帰還困難区域の道路脇の民家には防犯用のフェンスが設置されている

私にとっては、事故後初めての本格的な福島取材。第一原発を含め、初めて自分の目で現地の状況を確認することができた。当時目にした原発の絶望的な映像から比べると、状況はかなり改善されているようだった。一方で、車窓から見る街並みの様子からは、約7年が経過してもまだまだ復興は遠いという現実を感じた。

柏崎市に立地する柏崎刈羽原発は、再稼働への手続きが進んでいる。その是非は電力の安定供給、重大事故のリスクなどが絡み合い、県や市、地元住民も含めた議論が続いている。その議論に福島の教訓はどれだけ反映されているか―。今回の経験を踏まえて注視していこうと思う。

新潟日報社柏崎支局　小林　純

「静」と「動」、異様な光景

初めて帰還困難区域内に入った。バリケードで封鎖された街の中では、家や墓地がひっそりと残る傍ら、汚染土を搬入する中間貯蔵施設の運用が始まっていた。その「静」と「動」が対照的で異様な光景だった。

楢葉町を流れる木戸川でサケ増殖事業を行っている漁協組合の稚魚養殖池で解説を聞く

避難指示が解除されて1年近くたった街では、家屋の解体が進んでさら地が目立った。住民の帰還は芳しくない。「10人いれば10通りの考えがある。元の街には戻らない」。住民の言葉から、7年の歳月の長さを感じた。一方、事業を再開した漁業者や米作りに挑む若者たちに触れ、人間のたくましさも教わった。

福島から一番遠い原発立地県の鹿児島では、残念ながら事故の風化と原発問題への関心低下が進む。被災地を訪ねるたびに原発事故のむごさを感じる。「もし同じような事故が起きたら…」と不安も募る。今回見聞きしたことも糧に発信を続けたい。

南日本新聞社報道部　赤間　早也香

■**日程**（参加＝20社38人）
2月6日（火）A班が第一原発構内取材、昼食▼富岡ホテル：渡辺吏・代表取締役インタビュー▼同ホテル泊／**7日（水）**富岡駅でB班と合流▼さくらモールとみおか：モール内取材、昼食▼中間貯蔵施設視察▼旧エコテッククリーンセンター視察▼一般社団法人とみおかプラスとの懇談▼小沢晴司・環境省福島環境再生本部長、木野正登・経産省資源エネルギー庁廃炉・汚染水対策官、万福裕造・農業食品産業技術総合研究機構上級研究員との懇談▼いわき泊／**8日（木）**Jヴィレッジ：小野俊介・専務取締役の解説▼木戸川漁協：鈴木謙太郎・鮭ふ化場長との懇談▼木戸の交民家：運営する吉川彰浩氏らとの懇談▼福島大学うつくしまふくしま未来支援センター：同センター特任専門員・島崎延雄、谷信孝氏らとの懇談▼いわき駅でA班解散▼B班・富岡ホテル：渡辺吏・代表取締役インタビュー▼同ホテル泊／**9日（金）**B班が第一原発構内取材、昼食▼東京駅で解散
（原発構内代表撮影：渡辺幹夫・朝日新聞社ジャーナリスト学校ディレクター）

福島取材団（2・19～20）

●飯舘村　「までい」な村の復興

フレコンバッグの山が目立つ飯舘村だが、昨年3月末の避難指示解除で「マイナスからゼロに向かってのスタート」（菅野典雄村長）を切って以来、復興は着実に進んでいるように見受けられる。中心部には道の駅「までい館」がオープンした。

4月からは村内で一つに統合した小中学校が再開される。生徒が集まるかどうか心配されたが、100人近くが村外の避難先から通ってくる見通しだ。「小学6年生と中学3年生が多い。飯舘の小中学校の卒業証書が欲しいと言っている。これまで村づくりで心掛けてきたことが実った」と菅野村長は笑顔を見せる。

まだ帰還者は1割足らずだが、放射能の受けとめ方は「百人百様」だから、帰還をせかせるつもりはない。「避難者の大部分は村から1時間圏内にいる。ばらばらになったことに後ろめたさを感じる必要はない」と菅野さんは言う。焦らず愚痴を言わず、丁寧を意味する「までい」な村らしい復興を目指す姿勢である。

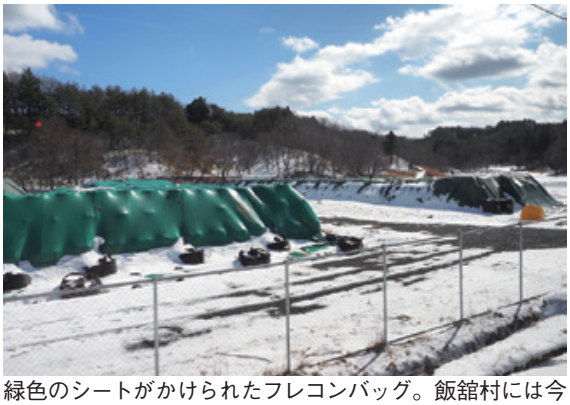
日本経済新聞出身　松本　克夫

飯舘村のいちご生産会社「いいたていちごランド」の佐藤博代表。震災3年後には出荷を再開。販路回復はできたという（福島民報社提供）

●古里のために

古里での暮らしは、時間がゆっくりと過ぎていくのだろう。福島県出身の田中俊一氏の表情は、原子力規制委員長として度々ニュースに登場していた頃に比べ、ずいぶん穏やかそうに見えた。

口調はもちろん、以前と変わらず鋭い。「食品の安全について、まっとうな学者はいないのか」「放射能というだけで必要以上に騒ぐのはメディアをはじめ日本の特性だ」。厳格すぎる食品摂取基準が農業や酪農の再生を妨げ、復興・再生の障害となっている現状を大いに憤慨する。



緑色のシートがかけられたフレコンバッグ。飯舘村には今も230万個が置かれているといわれる

「事故がもたらした最も深刻な問題はコミュニティーの崩壊」と考える。昨年12月から飯舘村に暮らすのも、人と人との絆を結び直すために自らも一役買いたいとの思いからであろう。村から復興アドバイザーに任命され、帰還した村民からさまざまな相談を持ちかけられる日々。「『昔に戻せ』ではなく、前向きに新しい村づくりを考えるしかない」「生きる力を持った子どもを育てたい」。熱気あふれる言葉が続いた。

中国新聞社特別論説委員　江種　則貴

●7年越しの小説

古里ではない福島の、放射線量が高い山寺に20代の男女が移り住む。作家、玄侑宗久さんの最新作『竹林精舎』（朝日新聞出版）は、そんな若者たちの物語である。取材団は2日目、桜で名高い三春町の福聚寺（ふくじゅじ）に玄侑住職をお訪ねした。

7年越しの書き下ろしを仕上げて「やっと吹っ切れた」と言う。原発被災地には、放射性物質のほかに人の世の煩わしさが多く降りかかった。科学不信、偏向報道、無思慮な風評、政治の不決断、官僚の頑迷。

議論ではなく、ともあれ行動しなければならない人たちには、放射線よりも遠巻きにする人間たちとの戦いの方が息苦しく、困難だったのかもしれない。現地の人々の語りがたさを、作家は小説にした。

何度も書き直した末の作品は、戻らない、戻れない人もいれば、福島で新たに出発する若者もいるという話になった。「震災について書くのは、これで一区切りにしたい」。玄侑さんの言葉に、苦い諦念と静かな決意が聞き取れた。

毎日新聞社編集委員　伊藤　智永

●「ゼロに向かい、新たな地域へ」

昨年春、避難指示が解除された飯舘村は農作地が広がるのどかな地域という印象だった。しかし、ところ

菅野典雄・飯舘村村長

田中俊一・飯舘村復興アドバイザー（前原子力規制委員長）

どころに除染廃棄物が入ったフレコンバッグが大量に積まれ、原発事故の事実を突き付けられる。飯舘村の菅野典雄村長は「放射能の災害はマイナスからゼロに向かう闘い。除染や風評被害の払しょくに長い時間をかける」と話し、覚悟の重さを感じた。

飯舘村の住民の帰還率は約1割。夜になっても灯りのともる住宅は見られず、慣れ親しんだ人たちのいない場所に戻ろうと思える人はどれだけいるのだろうと考えてしまう。

しかし、菅野村長をはじめ、田中俊一前原子力規制委員長、木幡浩福島市長の会見で聞かれた3者の共通する思いに希望を感じた。「住民を戻すだけではなく新たな住民を呼び込む地域づくりをしていく」。どんな魅力を創出していくのか、今後の取り組みに注目していきたい。

文化放送報道スポーツセンター　佐藤　圭一

●「弾丸ツアー」来年以降も

「弾丸取材ツアー」とひそかに恐れられている日本記者クラブの被災地取材団は2013年8月に始まった。計6回、岩手、宮城、福島の被災地に向かった。そのうちの5回に参加した。とにかくスケジュールが濃密だ。移動距離、時間も長く分刻みの日程に追われる。被災地の今を目に焼き付け、風化と闘う人たちの話をたっぷり聞いてほしい、という事務局の熱意の反映だと思いたい。

印象に残る場面はいくつもある。児童が7人、両親とも亡くした児童が10人、父と母のどちらかを亡くした児童は50人を超えた岩手県陸前高田市の高田小学校。木下邦男校長が時に涙を流しながら話した思いは胸に響いた。宮古市田老のホテルで見た当日の津波の映像は衝撃的だった。

原発事故の傷痕は今も生々しい。7年たっても何も始まっていない地域もある。震災を知らない世代も増えている。来年以降も弾丸ツアーに参加し被災地の姿を焼き付けたい。

企画委員　東京新聞編集局次長　瀬口　晴義

三春町・福聚寺の住職・玄侑さん。「変わりたくない、変えたくない」が震災後の日本人の心情だったのでは、と。近くの佐藤酒造も訪問。同酒造は福聚寺のしだれ桜の花弁からとった酵母を使った「一と口」などを製造している

■日程（参加＝13社32人）

2月19日（月）「いいたて村の道の駅までい館」▼菅野典雄・飯舘村村長会見▼同村蕨平地区にある焼却減容化施設（除染廃棄物などを処理）見学▼いちご生産会社「いいたていちごランド」佐藤博代表▼田中俊一・前原子力規制委員長会見▼岡本全勝・内閣参与・福島復興再生総局事務局長会見▼懇親会／**20日（火）**木幡浩・福島市長会見▼三春町・福聚寺：住職・作家・玄侑宗久さんと懇談▼佐藤酒造：柳沢康之・工場長▼郡山駅で解散

岩手日報社主催セミナー

避難所生活体験研修に参加

東日本大震災の体験から学ぶ岩手日報主催の記者セミナー（2月14日～16日）で陸前高田市を訪れた。

避難生活体験では、実際に避難所として使われた施設で一晩を過ごした。想像以上の寒さに、眠れないまま朝を迎えた。体調を崩しかねない厳しいプログラムは、被災地の思いを伝えるという地元紙の覚悟が伝わってきた。

また、被災者、記者の体験談を聞かせてもらった。150日間にわたり避難所運営に携わった菅野修さん（スポーツ用品店社長）の話は、非常時の知恵の宝庫だ。震災報道にあたった岩手日報の太田代剛さん、鹿糠敏和さんが、初動の苦い経験を語る。当時を思い言葉を詰まらせる場面も。かさ上げされた市街地で和雑貨屋を再開した磐井正篤さんの表情は、ふるさとで働く喜びに満ちていた。戸羽太市長の会見では、復興をやり遂げる決意が語られた。それぞれ違う話でも、根っこにあるものは同じ。「私たちと同じ思いをしてほしくない」という願いだ。

その思いと経験をしっかり受け取ることこそが、風化に抗うことなのだと感じた3日間だった。

クラブ事務局企画担当　村上　直人

※14ページに関連記事

特集「3・11から7年　今伝えたいこと」

日本記者クラブ会報では、毎年3月号に東日本大震災の特集を組んできました。今年は7年の今だからこそ取り組んでいることや、伝えたいことについて、被災地メディアの皆さんから寄稿していただきました。

避難所生活疑似体験イベントを実施
県内仮設にいまだ約7800人

■岩手日報社　太田代　剛

被災者は、東日本大震災の風化を恐れている。岩手日報社などが組織した実行委員会はその思いを受け、2月14～16日、被災地の岩手県陸前高田市で、東日本大震災の避難所生活を疑似体験し教訓を伝えるイベント「いざ・トレ」を初開催した。

南海トラフ地震が想定される地域の行政関係者や全国の新聞社、テレビ局の防災担当記者ら約90人が参加。震災で実際に避難所となった同市高田町の市スポーツドームにテントを張り、一斗缶で火をおこし、暖房や照明を落とし、寝袋で一夜を過ごした。外は大雨。恐ろしい雨音が響く中、午後10時半に就寝した。

避難所の疑似体験のためドームテントを設営する「いざ・トレ」参加者（2月14日／岩手県陸前高田市／岩手日報社提供）

最初はなんとか眠れたが、午前1時、3時、5時と時が進むとともに、地べたの冷えがじわじわとしみてくる。寝袋の中でがたがたと震えが止まらず、起床時刻の同6時にはすっかり精根尽き果てた。

この日の陸前高田の最低気温は0・5度。2011年3月12日未明の最低気温の記録は停電の影響で残っていないが、「小雪が舞った」という被災者の証言があり、氷点下だったと思う。

テントも寝袋もなく、家族の安否も分からず、いつ救援が来るとも知れず、真っ暗な一夜を過ごした被災者の苦難は、疑似体験とは比べものにならないほど厳しいものだった。

震災から間もなく7年。あの日、津波に襲われた同市気仙町の県立高田病院の屋上で凍える一夜を過ごした土岐民子さん（88）は、今も同市小友（おとも）町の仮設住宅にひとりで暮らしている。

土岐さんは病院の屋上からヘリでつり上げられ、同市の第一中学校避難所に降ろされた。心臓の持病のため、東京都内の病院に入院した後、仮設住宅へ入った。

旧士族の家に嫁ぎ、13部屋もある大きな家で厳しいしきたりに苦労しながら、小学校の教員を勤め上げた土岐さん。小さな仮設住宅でも名家の誇りを守って暮らし、取材にもりんと応じてくれたが、震災後7年の思いを尋ねた時にだけ「最初はすぐ新しい家が建てられると思っていたけれど、ずいぶん待たされた」と深いため息を漏らした。

土岐さんを取材した2月17日は、震災から2535日目だった。心休まる日は、そのうち何日あったのだろうか。同市中心部の区画整理事業は、20年度まで続く。

岩手県内では、今も7758人が仮設住宅（1月末現在、みなし仮設を含む）で避難生活を送っている。私たちは8年間の岩手県復興計画が最終年度となる18年度を前に、土岐さんら仮設住宅に残る被災者を一人一人訪ねて改めて思いを聞き今後の報道の指針を見いだそうとしている。

地震や津波の発生予測は、最新の科学をもってしても難しい。朝、普段通りに朝食を取り、「いってきます」と元気に玄関を出て行った家族と突然二度と会えなくなる、残酷な災害だ。被災者が絞り出す「もっと親孝行してやりたかった」「娘が行きたいと言っていたディズニーランドに、一度でも連れていってやりたかった」「苦労をかけた妻に、一言『ありがとう』と言ってやりたかった」という言葉の全てに、悔しさがあふれる。「風化への恐怖」を形成しているのは「もう二度と、誰にもこんな思いをしてほしくない」という切なる思いだ。

20年の東京五輪が近づく一方、震災の記憶は風化していく。私たちは、仮設を出る最後の一人まで、それぞれが望む形で生活再建を果たし、長過ぎた避難生活に笑顔で終止符を打つまで復興は終わらないと考える。震災10年を迎える前に「復興五輪」という見出しを胸を張って打てるよう、被災者に寄り添っていきたい。

（おおたしろ・たけし　報道部次長）

1月から長期連載スタート

「大川小の教訓」伝える使命

■河北新報社　山﨑　敦

石巻市立大川小学校は東日本大震災の大津波に襲われ、全校児童108人中、70人が死亡し、今も4人の行方が分からない。児童を保護していた教職員10人も亡くなった。「最も安全なはずの学校にいたのに、なぜ、わが子は亡くなったのか」。戦後最悪とされる学校管理下の事故にもかかわらず、震災から7年がたつ今も遺族は納得のいく答えを得られないでいる。

河北新報社は1月12日から長期連載「止まった刻（とき）　検証・大川小事故」を始めた。「止まった刻」は、あの日から止まった遺族の心と大川小の壊れた時計を表し、検証により1分1秒でも時計の針を進められたらとの願いを込めた。

検証は基本的に①3月11日午後2時46分の地震発生から津波襲来まで②遺族が提訴する大きな理由となったメモ廃棄など石巻市教委による事後対応③仙台高裁で焦点となっている事前防災―の三つの柱から成る。

「なぜ、今、大川小なのか」と聞かれるたび、遺族の疑問がいまだに解消されていないことに加え、「2018年は大川小にとって二つの大きな節目の年だから」と答えている。

一つ目は裁判。16年10月の仙台地裁判決は「教員らは大津波の襲来を予見でき、裏山に児童を避難させるべきだった」と学校の責任を認め、計約14億2600万円の支払いを石巻市と宮城県に命じた。市と県が控訴し、仙台高裁判決が4月26日に言い渡される。原告が勝てば、判決は全国の教育現場にとって新たな「指針」となる公算が大きい。

二つ目は1873（明治6）年に開校した大川小（当時は釜谷小）が3月に閉校するためだ。震災後、大川小は内陸の二俣小の敷地内に仮設校舎を建てた。児童数の減少により、二俣小と統合し、145年の歴史に幕を下ろす。

大川小の取材は当初から困難が予想され、今も手探りの状態が続く。当時、学校にいた教職員11人中、唯一、助かった男性教務主任（56）は心的外傷後ストレス障害（PTSD）を発症し、今も病気休職中だ。津波襲来時、学校にいて助かった児童4人のうち、取材に協力してくれているのは当時5年の只野哲也さん（18）＝高校3年＝だけだ。

■語り始める卒業生たち

証言者は限られ、しかも高いハードルが待ち受ける。新たに協力を得られたとしても、7年の歳月による記憶の揺れなどが立ちはだかる。一方、7年たつ今だからこそ、重い口を開いてくれた関係者も少なくない。

被災した大川小。背後に裏山が広がる（2017年12月15日／宮城県石巻市釜谷／河北新報社提供）

当時の状況を再現し、検証する作業は一筋縄ではいかないが、うれしい出来事もあった。当時の5年生は今18歳、6年生は19歳になった。自らの意思で取材に応じてくれ、貴重な新証言を集めることができた。あの日の校庭の様子をリアルに再現できたのは、卒業生たちの驚くべき記憶力のおかげだ。

震災で悲しい思いをする人たちを二度と生まない―。「大川小の教訓」を広く伝えることが地元紙に課せられた使命だと思う。同時に取材班の思いは、長男大輔君＝当時（12）＝を亡くした原告団長今野浩行さん（56）の次の言葉に集約される。

「学校防災の教訓のために子どもを産み、育てたわけではない。本人には夢もあった。助からなかったため、教訓という言葉を使うしかない。あの日、校庭で何があったのか？事前の備えは十分だったのか？　なぜ、大川小だけだったのかを検証しなければ、次の教訓にはならない」

なぜ、大川小だけなのか？　多くの記者が挑んできたが、達成感に浸っているとの声は聞かない。全国の記者たちと切磋琢磨しつつジグソーパズルのピースを埋めていきたい。

（やまざき・あつし　大川小事故取材班キャップ）

川内村

ワイン造りで次のステージへ

■福島民報社　須藤　茂俊

東日本大震災と東京電力福島第一原発事故から丸7年を迎える福島県川内村は「復旧・復興から継承・創生へ」を掲げ、村づくりに取り組んでいる。新たな農業・産業の振興を目指し、2016年から進めているワイン醸造事業が注目される。

村は原発事故後の新たな農業のあり方を探る中で、付加価値の高い農作物の栽培、6次化商品の開発につながるワイン醸造に注目。震災前、畜産業が盛んだった北西部の川内村上川内字大平の高台にワイン醸造用ブドウ栽培の農地を整備した。16年、一般社団法人「日本葡萄酒革新協会」の指導で地域住民らが「高田島ワインぶどう研究会」を設立し、ブドウ栽培をスタートした。これまで約2・7ヘクタールの農地に1万本近い苗を植栽した。

昨年8月にはワイン造りを本格化させるため村出資によるワイン醸造会社を設立した。今後はブドウ畑を現在の約2倍の広さに拡大し、隣接地に醸造施設や貯蔵施設を整備する方針で、20年の東京五輪・パラリンピックに合わせて川内産ワインを売り出すことを目指している。村は観光客が増えることも期待しており、将来的には宿泊施設やレストランを設けることも視野に入れている。

川内村上川内字大平に広がるブドウ畑（福島民報社提供）

川内村は原発事故による全村避難後、12年1月、遠藤雄幸村長が帰村宣言し、同年4月に役場機能を避難先の郡山市から村内に戻した。現在、除染や社会基盤の復旧、整備がほぼ終わり、今年2月1日現在、約2700人の人口のうち、約2200人が村内での生活を再開している。帰還率は8割を超えたが、20代から40代の子育て世代とその子どもらの帰還が進まないなどの課題もある。村はワイン醸造事業を進めることで、ブドウ栽培やワイン造りに興味を持つ人が村内に定住し、交流人口が拡大することを目指している。

震災と原発事故後、いち早く古里に戻り、社会基盤の整備をほぼ完了させた川内村。復旧・復興の次のステージを見据えたワイン醸造事業が、人口減少期を迎えている全国の地域づくりのモデルになることを期待したい。

（すどう・しげとし　双葉南支局長兼いわき支社報道部副部長）

南相馬

若い世代　復興の大きな力に

■福島民友新聞社　渡辺　久男

東京電力福島第1原発20キロ圏内の福島県南相馬市小高区と原町区の一部。市内ではもっとも遅く、避難指示が2016年7月に解除された。市によると、今年1月現在で2818人が生活している。住民の帰還も徐々に進んでいるが、商業施設や医療・福祉施設など、整備は進めているものの不足は否めない。

小高区では17年4月に市立小、中学校が再開し、実業高校2校が統合した県立小高産業技術高が開校。若い世代が地域に増え、活気が戻ってきたように感じる。ほかの原発事故被災自治体と比較して考えてみると、若い世代の活力は、復興に向け大きな力になると感じる。

同校の校歌の作詞を担当した、芥川賞作家の柳美里氏（49）。17年7月に原町区から小高区に転居した柳氏は、転居先の住宅兼倉庫で18年中に書店と劇場の開業を目指している。「高校生たちが帰りの電車を待つ間、時間つぶしができる場所が小高にはほとんどない。その生徒たちのためにできることが書店だった」と明かす。また、劇団出身でもある柳氏は「小高は福島第1原発から20キロ圏内で警戒区域というレッテルが貼られた場所。劇場をきっかけに人を呼び込めれば」と願う。

柳美里氏（右）らが開催した書店と劇場のプレオープン・イベント（2017年12月／福島県南相馬市小高区／福島民友新聞社提供）

震災・原発事故発生から2回目となった今年1月の市長選は、震災・原発事故発生当時の市長で、政府の原発再稼働路線を厳しく批判してきた桜井勝延氏（62）と、震災当時、市の経済部長だった門馬和夫氏（64）の一騎打ちとなった。ともに「脱原発」のスタンスで、子育て支援政策の拡充など政策の方向性もほぼ一致していたが、2101票差で門馬氏が競り勝った。門馬氏が掲げた「対立から対話」の姿勢に、有権者は残された復興・創生期間での復興のさらなる加速と地域の発展へ期待を寄せたのだろう。

南相馬市の復興の進捗はほかの自治体と比べてまだまだかもしれない。しかし、いつまでも「被災地」とくくられる時期からは徐々に脱してきているように感じるのだ。

（わたなべ・ひさお　浪江支局長・相双支社）

似顔絵作製記事で特集

■石巻日日新聞社　平井　美智子

東日本大震災からの7年間、石巻日日新聞には常に震災関連の記事が載っている。トップ記事もあればベタ記事もあるが、どこかに「震災」や「復興」の文字が入る。被災地の現状を視察研修に訪れる学生をはじめ県外の人たちにそう伝えると、素直に驚き震災を改めて思い返す人も少なくないようだ。そしてあの日以来、被災地では「日常」が「非日常」からスタートし、一つ一つの喜怒哀楽の積み重ねによって動いていることを心に刻んで帰っていく。

報道部の私のデスク後ろのボードに貼っている2016年12月14日付6面（最終面）の縮小コピーもそんな紙面の一つ。「震災から5年9カ月一日も早く家族のもとへ」の見出しの下には、宮城県警が作製した身元不明者7人の似顔絵と身に着けていた服や所持品の写真が並ぶ。

東日本大震災による石巻地方（石巻市、東松島市、女川町）の犠牲者は5160人。このうち約700人は今も行方不明だ。一方で遺体が見つかっても身元が分からず、今も県内の霊安室にとどまっている遺骨は10柱。生前、何という名前で、どこでどのような暮らしを送ってきたのか―。科学技術が進歩を遂げた現代でも照会する手立てとして似顔絵が必要とされている。これが未曾有の災害に直撃された被災地の現実だ。1年以上前の紙面コピーを貼り続けているのは、この現実を忘れてはいけないとの思いからだ。

計100体の遺体から似顔絵を作製した元宮城県警の安倍秀一さん（石巻日日新聞社提供）

3月11日を前に組む特集企画で今年は似顔絵を作製している県警関係者を取材し、絵に託した思いや公開後の反響などについて取り上げた。作製者たちは、遺体の頭部にわずかに残っていた頬や口の筋肉を頼りに「何とかしてやろう」の一念で描いたという。中には焼死体や骨に近いものもあるが、歯牙の確認などで年齢層を割り出してイメージを作り仕上げた。こうした話を地元住民である読者に伝えることで、再び関心を持って似顔絵に触れ、小さな情報でも寄せられることを期待している。それが地域紙の役割でもある。

（ひらい・みちこ　報道部長）

三陸全体の復興構想を

■IBC岩手放送　宿輪　智浩

「イーハトーブ（理想郷）は築けていないよ…」

震災以前から親しくしている釜石市の男性に7年たったまちの状況を聞くとこう返ってきた。地域間で差はあるものの、岩手県沿岸部の復興は目に見えて進んでいる。復興交付金による大型事業はほぼ着工済みで、新しい商店街やマンション型の公営住宅も続々と整備された。それでも冒頭の言葉が出る背景には、将来の展望が見えないことがある。

7年間はあっという間だった。風化に抗うわけでもなく、今も自社のニュースに被災地の話題が登場しない日はない。夕方のニュース番組では毎週水曜日に「復興への羅針盤」というタイトルで6分前後の特集を放送し続けている。被災地である宮古市、釜石市、大船渡市の駐在社員を中心に制作していて、作業は大変だが話題に窮することはない。アナウンサーが仮設住宅を訪ね、住民に心境を語ってもらう「仮設住宅は今」もシリーズ化していて、放送は50回を超えた。このほか3カ月に1回、「忘れない3・11」と題した報道特別番組を放送しており、名物店の再開や、水産業の苦境、方言劇で人々を楽しませる集団などが最近の主人公となった。ハード整備の完了に伴い、より心の復興をテーマにしたものが増えていくだろう。

このように被災地と共に走り続けたつもりの7年間だったが、行政の復興事業と同じく、われわれにもグランドデザインが足りなかったかもしれない。全体としてどんな地域づくりを目指すのかが弱く、その場その場で個別の事柄を取り上げたに過ぎなかったのではという反省だ。

宮沢賢治の「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」は壮大な話だとしても、三陸の人々の幸せを考えた地域全体の復興を今からでも描いていくべきだ。スタジアムを造っても利用する人がいなければ、防潮堤を造っても守る人がいなければ意味がない。住民の感覚とずれのない提言をし、未来を描いていくことは、地域メディアの責務と考えている。

最後に。自然災害は止められないが、この大きすぎた被害を教訓に、その土地を知り、人を知り、気質も知る全国の地域メディアが、それぞれ減災報道を続けることを願う。

（しくわ・ともひろ　報道部デスク）

平昌五輪

北朝鮮応援団に違和感も

長尾　一史（共同通信社ソウル支局）

平昌冬季五輪取材のため約1カ月、現地に滞在した。運動部の協力を得つつ北朝鮮選手や韓国選手の話題などを追ったほか、競技取材とは別に事件や事故もカバーした。

北朝鮮選手団には韓国政府関係者が随行し、接触や取材はなかなか難しかったが、開幕後、競技場の取材ゾーンで声を掛けた選手らは、意外と気さくに応じた。「元帥様の愛により練習できている」「北と南が一緒になれれば」など、「模範回答」が中心ではあったが、アルペンスキーで失格となり「これでは満足できません」と語った女子選手の、ごく自然な笑顔は印象に残った。

アイスホッケー女子の南北合同チーム「コリア」の試合に訪れた北朝鮮応援団は、試合の合間のイベント中も、お構いなしに応援を続け、客席に違和感が漂った。「美女」の枕詞も付く一団だが、近年、女性の自立を重視する韓国では「女性を政治宣伝の道具にした」との否定的な見方もある。韓国でかつてのようなフィーバーは起こらなかった。

日本戦のみブーイング

注目の「日韓対決」では韓国側の反応を取る役回り。スピードスケート女子で優勝した小平奈緒選手と、韓国の李相花（イサンファ）選手が見せた抱擁は、韓国でも今大会の名場面の一つで、現場の韓国記者は「小平選手の人間性に関心が高まった」と語った。

カーリング女子の韓国代表は「ニンニク少女」の愛称で国民的人気を得る中、準決勝の日本戦は異様に盛り上がった。韓国のショットが成功するたびに張り裂けんばかりの大歓声。日本のミスショットに「ありがとう！」と日本語で叫ぶ観客もいた。アイスホッケーで「コリア」の試合は全て見たが、相手選手の反則に大きなブーイングが起きたのは日本戦のみ。日本の「アウェー感」は他国に比べ強かったように思う。

日本戦でゴールを喜ぶ韓国と北朝鮮の合同チーム「コリア」の選手たち（2月14日／共同通信社提供）

指先の感覚なくなる寒さ

苦労したのは、やはり寒さ。開会式の夜は氷点下4度ほどと比較的「温かく」なったが、それでも外の記者席で原稿を書き続けると指は動きづらくなった。屋外のデモや公演、北朝鮮の「三池淵管弦楽団」の出待ちなどの際、手足の指先の感覚がなくなるほど冷えた。

寒さも影響してか、スキージャンプなど酷寒の競技会場では空席が目立った。観客がスタンドの裏で暖を取る姿も見られた。大会全体のチケット販売は目標を上回ったというが、各会場には団体客が多く、取材の中でチケットをいつ、どのように入手したか聞くと、高校生らはだいたい「学校の方で…」と答えた。かねて懸念された「関心の低さ」が根本的に解決されたとは言い難いようだった。北朝鮮参加を巡っては、緊張緩和につながったとの評価がある一方、五輪に詳しい同僚は「今回ほど政治が絡んだ五輪は珍しい」と振り返った。

警察の取材対応には好印象

一方、大会ボランティアはみな親切だった。対応力にばらつきはあったが、「分からない」とたらい回しにする前に、まず自分で何とかしようとする姿勢には好感が持てた。

事件関係では、スピードスケート・ショートトラック女子で韓国選手を破ったカナダ選手に対するネット上での殺害予告、入場券販売を偽った詐欺など数件にわたり警察に当たったが、対応は極めて丁寧だった。韓国では、海外メディアの五輪報道のうち、日本メディアが特に手厳しいと伝えられている。警察官も取材は不快だったかもしれないが、「お疲れさま」「分からないことは何でも聞いて」と応じてくれた担当者に頭が下がった。

ながお・かずふみ▼2003年入社　神戸支局　佐賀支局　福岡支社　外信部などを経て14年11月からソウル支局

コインチェック問題

変質する仮想通貨 〝未来の通貨〟はどこへ向かうのか

山口　学（NHK経済部）

「ネットで大変な話が出ています！　すぐ、NC（ニュースセンター）に来られますか？」

1月26日午後。経済部の居室でまどろんでいた私に入った連絡がコインチェック報道の始まりだった。

足早にNCに上がってまず目にしたのが「約580億円が送金されている…」という謎のツイート。

そして、「NEM（ネム）の入金、出金、売買を停止している」というコインチェック社のツイートだった。

580億？　NEM？　何だかよく分からないがこれは大ごとになる。

私は直ちに出稿するよう現場に指示した。しかし、記者がコイン社に問い合わせてもなしのつぶて。

そうこうする間に金融庁が事実関係を調査という情報が入り、まずは、コイン社がホームページ上で明らかにしている事実をベースに出稿したのが立ち上がりだった。

その後コイン社は、深夜になって会見し、不正アクセスで580億円相当のNEMが流出したことを明らかにした。報道は一気にヒートアップし、その余波は問題発覚から1カ月がたった今も続いている。

悩ましい難解な用語の説明

コインチェック問題を報じていく上で頭を悩ますのが、仮想通貨ならではの専門用語の数々だ。

私は長年、金融取材に携わってきたが、仮想通貨の知識は初級者。「NEM」も初耳だった。

「仮想通貨」や「交換会社」自体、ニュースでの伝え方が難しいのに、今回の問題では、「ホット／コールドウォレット」「マルチ／シングルシグ」等々、技術的な用語が頻出する。ただ、これらはNEMの流出原因にかかわるキーワードだけに、避けては通れない。仮想通貨の難解な用語・仕組みをどう説明すれば、ミスリードすることなく、わかりやすく伝えられるのか。当事者や専門家の取材を踏まえ、コメント、映像、模式図などを一つ一つ考える日々だ。

また、当事者であるコイン社への情報取材も難題だ。渦中の幹部へのアプローチは無論、被害者への補償という重要な決定を何のアナウンスもなく未明に突然、しかもホームページ上だけで公表するなど、悪戦苦闘が続いている。

主な仮想通貨のロゴ　中央がNEM（NHK提供）

巨額流出問題が投げかけるもの

「昭和の3億円事件どころじゃないね」。私の周りでは、そんな感想も聞かれる。被害総額580億円、被害者総数26万人は確かに前代未聞。ただ、被害者は「悔しい！」「裏切られた！」と言いつつ「これからも仮想通貨に投資していく」と答える。問題発覚後、コインチェックの本社前には20代～30代と見受けられる若者が多く集まった。高度成長、バブルとは無縁で、長きにわたる低成長時代を歩んできた世代にとって、仮想通貨は自ら育て、生み出すこともできる〝宝の山〟であったりするのでは…。取材を通じ、そんな思いにかられる。

ただ、その背景にあるのは仮想通貨の〝変質〟だ。いつでもどこでも、安価なコストで送金できる新たな決済手段として登場した仮想通貨。ところが今や仮想通貨は、投機対象としての性格が強まり、犯罪収益のマネーロンダリングへの悪用も懸念されている。さらに、財政危機のベネズエラが原油を担保にした仮想通貨「ペトロ」を発行するなど、いわば〝錬金術〟の手段としても論議を呼んでいる。

日本をはじめ世界各国が規制強化の動きを活発化させるなか、〝未来の通貨〟とも期待される仮想通貨は今後どこへ向かうのか。そして、社会・経済にどのような影響を与えていくことになるのか。今回の問題は大きな問いを投げかけている。

やまぐち・がく▼1992年入局　財研キャップ　金融・民間総キャップなどを経て　2015年から経済部デスク

新・列島報告⑲　福井県

大雪対応 激動の10日間
降版繰上、代行印刷、電子版開放

安達　洋一郎
（福井新聞社）

今思えば全く高をくくっていた。一部の気象予報会社は過去の豪雪並みの大雪になると警告していた。事前に社長以下役員、各局幹部が集まって対応を検討した。それでも半信半疑。何せ、毎冬大雪警報が出されても福井市ではせいぜい20～30センチしか積もらない。「雪国福井」という言葉は市民意識の中で死語になっていた。ところが…。

■記者が家から出られない

2月5日深夜から福井県の北部を襲った大雪は6日昼までに福井市で130センチを超えた。暗いうちに起きて市内の自宅から車を出そうとしたものの、既に80センチほど積もった雪に阻まれ断念。趣味の釣り用に買った防寒着を着込み、スパイクブーツをはいて徒歩で社に向かった。入社36年目にして初めてのことだった。

1時間ほどして社に着くと、早出を指名していた記者が家から出られない。県庁や福井市役所には何人かが歩いてたどり着き、断片情報は入っている。通勤途中の記者、カメラマンはそのまま動ける範囲で取材を始めているとの報告。大雪の現場が1カ所に特定できるわけもなく、逆にどこを撮っても同じような混乱状態だろう…。写真を押さえられることが分かってほっと一息ついた。

午前9時の幹部会議では、減ページした上で降版時間を繰り上げることを確認。肝心なのは運送業者に委託している新聞発送トラックが社に到着できるかどうか。状況によっては早版紙面（県南部地域が対象）の代行印刷を京都新聞に要請する―と決まった。編集局から出席していたわれわれに緊張が走った。

福井県の大動脈である国道8号は大雪で立ち往生する車で66時間にわたってマヒした（2月6日／福井新聞社提供）

京都新聞との協定では代行印刷は本紙16ページでカラー面は4枚のみ。降版時間は異次元の設定になる。普段なら夜勤の整理記者が夕食を取り、そろそろ体裁を考えようかという時間帯までに全ての版データを送らなければならない。会議が終わるのを待たず、内外勤を担当する2人の局次長は飛び出していった。

■大動脈はマヒ状態

このとき既に福井県と石川、滋賀を結ぶ北陸自動車道は通行止めになっていた。後になって分かったことだが、同じく物流の大動脈である国道8号では、最終的に1500台もの車が立ち往生する大渋滞が静かに進んでいた。

午後2時、国道8号の立ち往生解消のため県が自衛隊に災害派遣を要請するに及んで事態の深刻さが分かってきた。福井市内の道路が車で埋まり、記者が移動できる空間は限られる。間断なく降る雪でヘリも飛べない。各地の状況は行政情報に頼るしかなかったからだ。

代行印刷の要請が決まった。正式決定に備え、減ページで浮いた整理記者を残る紙面のサポート役とし、整理時間を大幅に短縮する。原稿の少なさは写真グラフでカバーする―などを決めていた。最終的に「福井37年ぶり130センチ超」の大見出しが1面に躍る紙面が出来上がった。

しかし翌7日以降、刷り上がった新聞を配達できない地域が県北部の広範囲に及んだ。配達員が販売店まで来られない。生活道路の除雪が進まず読者宅にたどりつけない。配達員の車のガソリンがない…といった報告が読者局から相次いだ。おわびの意味を込め、有料電子版「D刊」を無料で開放したほか、特別班をつくってさまざまな生活情報をホームページに掲載した。

2月6日からの激動の10日間はあっという間に過ぎた。編集局全員がよくやってくれたという手応えを感じつつ、できることがまだまだあったのではないかと自問自答している。点検検証を進め、この経験をしっかりつないでいきたい。

あだち・よういちろう▼1982年入社
社会部長　経営企画室次長　報道センター長など　15年7月から編集局長

私が会ったあの人

「会津の冬」へいざなう 版画家・斎藤清さん

高橋　雅行（福島民報社）

この冬も、雪と闘うニュースが全国各地から舞い込んだ。雪国に住む一人ではあるが、被害に遭ったり、甚大な影響を受けた皆さまにはあらためてお見舞いを申し上げたい。

雪の季節になると、脳裏に浮かぶ版画家がいる。斎藤清さん。どれほどの知名度があるか、推し量る術もないが、没後20年余を経てなお、内外の評価、人気に陰りはない。作品に接する機会がなかったのであれば、この拙文をきっかけに、ぜひ、触れていただければと願う。

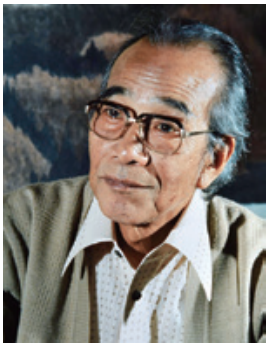
斎藤さんは1907（明治40）年、福島県の会津坂下町に生まれた。幼少のころ、家族と北海道に移り、炭鉱のまち夕張や札幌などで育った。看板描きの仕事などで生計を助け、20歳を過ぎて上京した。

以後、職を経ながら、独学で美術を学んだ。サンパウロ・ビエンナーレで受賞するなど数々の国際展で異彩を放ち、近代日本を代表する版画家として名を刻んだ。版画、絵画などあまたの斎藤さんの作品群の中でわたくしが特に引かれるのは、ライフワークともいえる版画「会津の冬」シリーズである。

郷里の会津であれ、北海道であれ、半端ではない降雪量は生活の足かせだったろうし、厄介者でもあったことは想像に難くない。

ところが、斎藤さんが「会津の冬」で描く雪景色は実に優しいのである。屋根を押しつぶさんばかりの雪塊も、どこか丸みを帯びた風情で、人々を苦しめる感は薄い。むしろ、温もりをたたえる構図といっていい。古里への限りない愛情を刷り込んだのであろうか。とりわけ、雪景色の一隅に、採り残された赤い柿の実がポツンと枝にたたずむ光景には、たまらないほどの郷愁をそそられる。

版画「会津の冬」シリーズの展示作品


独学で版画を学び、近代日本を代表する作家となった斎藤清さん

ちょうど80歳になる1987（昭和62）年、神奈川県鎌倉市からいとこの住む会津の柳津町に転居した。当時、わたくしはこの町も守備範囲とする支局に勤務していたため、斎藤さんと懇意にさせていただく運を得た。縁を結んでくださった斎藤さんのいとこの渡部さんご夫妻への感謝の念は今も消えない。

「俺は学校も出ていないから、学術的なことは何にも知らないが、同じことを続けていてはダメだと常に自分に言い聞かせてきた」

偉ぶらず、飾りっ気のないぼくとつとした人柄。能弁ではないが、言葉の一つ一つに重みと説得力があった。

「なぜ雪景色を描くかって…。雪は余計なものを消してくれるし、描きたいものだけを目に入れてくれるから。その構図が自分に合うんだよ」

「会津の冬には詩情を感じさせるもの悲しさが漂っている。生活の厳しさ、寂しさでもあるのかな」

強力なバックボーンなど持たずとも、自身の感性を信じ、黙々と彫り続けた。その一途さも魅力だ。

ある時のインタビューで「郷里を描いて多くの人々から喜ばれ、作品が愛される。うらやましいですね」と語り掛けたら、即座に返ってきた。「とんでもない。制作は苦しいもんだ。周囲の期待が大きくなれば、なおさら」と。功成り名を遂げてなお苦しみがあることを知った。

より深く、より質の高いものを目指すにはプレッシャーとの闘いがある。斎藤さんの生き様そのものがわたくしの処世訓である。

（たかはし・まさゆき　代表取締役社長）

写真はいずれも福島民報社提供

次号は梅野修さん（共同通信社）にバトンが渡ります。

東欧革命後の混乱取材
波瀾万丈の出国劇も

岡田　実

おかだ・みのる
1973年北海道新聞社入社　本社と東京支社の政治経済部ウィーン駐在　経済部長などを経て取締役　2014年専務取締役で退任　現在　フリージャーナリスト

１９９０年夏から2年間、特派員としてウィーンに駐在した。１９８９年後半に雪崩を打って起きた東欧改革を受け、ドイツ・東欧全域をカバーする仕事だった。

ドイツ統一やワルシャワ条約機構解体、ユーゴ戦争、チェコスロバキア分裂、さらには湾岸戦争やソ連崩壊直後に生まれたロシアの経済改革まで取材し、世界史の大転換に立ち会うことができた。

政権や野党の幹部、政治、経済の識者から市井の人々まで幅広く声を聴き、ルポやインタビュー記事、連載企画にまとめた。これによって、それぞれの国の全体像をつかみ、近い将来まで予測することが、ある程度はできたと自負している。国家の統一、分裂、独立を目の当たりにして、盤石に見える国家という存在が意外にもろいことも実感した。

90年10月2日のドイツ統一前夜。ベルリンのブランデンブルグ門周辺で、統一を祝う50人以上を取材した。3日午前0時を期して東ドイツの共和国宮殿（国会議事堂）に掲げられていた同国国旗がするすると降り、東ドイツが消滅した瞬間を目撃した。

その場にいたミュンヘン在住のドイツ人が「国を失うなんて東ドイツの人はかわいそうだ」と、同情した。すると西ベルリンで生まれ育ったという友人が「何を言うんだ。われわれはずっと壁に囲まれて暮らしてきた。ドイツが一つになるほど素晴らしいことはない」と反論した。私にはどちらの気持ちも理解できた。

取材のエピソードには事欠かない。中でも90年末、ルーマニア革命1周年の取材で体験した小さな冒険旅行が記憶に残っている。いま振り返っても、革命後の混乱や人々の意識が鮮烈によみがえる。

◆緊迫したルーマニア革命1周年

東欧で唯一流血革命となったルーマニア。革命1周年を記念する市民集会が90年12月21日昼から、ブカレスト大学広場で2万人を集めて開かれた。

広場は1年前、革命派とチャウシエスク前政権側が激しく銃撃戦を繰り広げ、多数の死傷者が出た場所。集会は犠牲者の追悼が目的だが、「イリエスク新大統領は共産主義を捨てていない」との疑念を持つ市民たちが「第二の革命」を叫び、夜を徹して行われた。翌日にはゼネストにまで発展した。

警官隊が遠巻きにし、誰かが爆竹などで挑発すれば銃撃戦が始まりそうな気配。いつでも逃げられる位置を考え、取材を進めた。

一連の取材を終え、23日、空路ウィーンに帰る予定だったが、ストで空港が閉鎖された。現地にいる「赤旗」支局長に相談すると「国際列車は動いているが、やめた方がよい」と忠告された。

彼の友人が数日前に列車でハンガリーからルーマニアに入った際、国境で男たちが乗り込んで来た。酒を勧められ寝込んでしまった。目が覚めると財布がないうえ、ものすごい形相でにらまれ、何も言えなかった―という。革命後の混乱で警察力が弱まり、国境周辺では犯罪が頻発しているそうだ。

列車だとハンガリーを経由しなければならず、飛行機で来た私は同国のビザも持っていない。

ただ、いつまでもブカレストにいるわけにいかないので意を決し列車

に乗ることにした。安全な一等寝台を確保できれば、と車掌に50ドルのチップを渡した。当時のルーマニアでは結構な額だ。彼は「ビザは列車内で取れる」と言い、丁重にも私を駅長室に案内した。

◆ビザなく列車から降ろされる

列車は23日午後7時発ブダペスト行きのオリエント急行。ところが一向に出ない。夜中の2時を回ると10数人の乗客が駅長室に押しかけてきた。一人でいた私に口々にまくしたてる。列車の遅れを憤っていたのだろうが、言葉を解しないアジア人相手ではらちが明かない。彼らは早々に引き上げた。

やっと出発したのは24日午前5時。実に10時間遅れだ。寝台車に乗り込んだら大変なオンボロ。これが世界に名高いオリエント急行かとがく然とした。部屋にルーマニア人2人がイコン（聖画像）をたくさん抱えて乗り込んできた。手まねで話すと、イコンをブダペストで売るのが目的なようだ。

革命1周年を記念する市民集会の前に犠牲者へ哀悼の意を捧げる市民たち（ルーマニア・ブカレスト大学広場/1990年12月/筆者撮影）

10時間ほど走り、午後3時、国境近くのクルティチ駅に着いた。ルーマニアの旅券係が来て2人を列車から降ろした。イコンを調べるらしい。2人が無事戻って来たので「よかったね」と合図した。次にハンガリー側の旅券係が入って来てビザを見せろと言う。「列車内で取れるはずだ」と言ったが、有無を言わせず、今度は私が降ろされてしまった。

荷物を持ちあぜんと立っていると、車窓から乗客が「ビザなら国境で取れるぞ」と、ドイツ語で話しかけてきた。国境までは60キロあるという。

そのうち数人の男が寄って来た。国境まで運ぶ白タクらしい。その中に英語ができる30代半ばの青年がいたので、迷わず彼を選んだ。

日が落ちかけていて、荒れた畑地帯を走り続けた。下手すれば身ぐるみはがされるかもしれない。

すると彼の方から「日本ではクリスマスを祝うのか？」と、聞いてきた。そうだ。今日はクリスマスイブだった。

彼は「今日は特別な日だ。チャウシェスク時代は祝えなかったが、初めて祝える。あなたを送ったら早く家に帰りたい。妻と娘がケーキを焼いて待っているから」と、答えた。

彼は、ドイツ系ルーマニア人で、電車のパンタグラフの技師。高圧電線を扱う危険な仕事で、白タクは副業という。カネをため家族でドイツに旅行するのが夢だ―と熱っぽく語った。

国境に着いた。薄暗かったが原野が広がり、柵の向こうに小屋のような入国管理事務所がポツリと立っている。門扉は無人で、歩いてハンガリーに入った。

そこでビザを取得できたものの、ここから最寄り駅のベーケシュチャバまでさらに50キロ。タクシーを呼んでもらい、ひた走った。

ハンガリー通貨フォリントを持っていなかったのでいろいろもめたが、ベーケシュチャバから3時間列車に揺られ、ブダペスト東駅に着いたのは夜中の12時を回っていた。ホテルを数件回り、泊めてくれる場所をやっと見つけた。

翌日早朝、ブダペスト駅に行くと、イコン売りの2人に出会った。私を心配してくれていて、思わず3人で抱き合ってしまった。

ウィーン到着は25日昼。空路なら2時間足らずの行程が、2日近くかかる長い長い旅だった。もし列車が定刻に出ていたら、クルティチに着いたのは真っ暗な午前5時。物騒な時間帯で、列車の遅れがかえって幸いした。

◆ブカレスト再訪　大統領銃殺を問う

92年5月にブカレストを再訪し、革命政権で首相を務めたペトレ・ロマン救国戦線議長に単独インタビューした。イリエスク大統領と前年秋に袂を分かっており「鉱山労働者の暴動を利用して私を政府から追い出した」と、同大統領を厳しく批判した。政治情勢は依然、安定にはほど遠かった。

彼に「チャウシェスク前大統領の銃殺に関与したか？」と聞いてみた。簡易裁判の直後に処刑されたことに世界中から批判が出ていたからだ。ロマン氏は「すぐ処刑されたことは知らなかった」と、否定した。

ルーマニアのみならず東欧各国で、自分たちの行く末を真剣に考え、変革に伴う困難な中でも家族を愛し、したたかに生き抜こうとする人々に数多く出会えた。これが私の財産になっている。

マイBOOKマイPR

■官僚たちのアベノミクス――異形の経済政策はいかに作られたか　軽部謙介（時事通信社解説委員）

岩波新書
929円

国家意思形成の舞台裏に迫る　権力を持つ側と、行使される側は、立場が違う。「ペンタゴン・ペーパーズ事件」の米最高裁判決でブラック判事が述べた有名な箴言もこう説く。

報道の自由が保障されるのは、統治する者ではなく統治される者に奉仕するからだ―。

それゆえわれわれの基本任務は「権力の監視」。事実を積み上げ国家意思の形成プロセスを解剖する試みは、その表現形態の一つだろうと考えている。この本が「統治される者」に奉仕できているなら本望です。

■ルポ　最期をどう迎えるか

共同通信社・生活報道部

岩波書店
1,512円

老いと死、丹念に取材　高齢化に伴い、年間130万人以上が亡くなる「多死社会」に突入した日本。老いの最期に人々は何を思うのか。自宅で親を看取った家族、延命治療を巡る葛藤、ひとり身で逝く選択…。共同通信の取材班が「死」に真正面から向き合い、ルポした連載記事を１冊にまとめた。介護施設での看取りの実践や救急現場の実態、ホームホスピスの試みなども収録。識者インタビューを交え、最期まで自分らしく生きるためのヒントを探る。

「ペンタゴン・ペーパーズ」感想をお寄せください

終了後、ロビーは高揚した会員たちの興奮に包まれた。冗舌に感想を語り合う光景もあった。

上映素材がクラブ10階ホールで対応できないとわかり試写会を諦めかけたところに、配給の東宝東和の厚意で、クラブ初の外部ホール貸し切りの試写会が実現した。しかも昼夜２回。案内を出した３日後には、昼の部は定員167人に達して抽選に。20人強が夜の部に回った。

余韻は翌日以降も続いた。ラウンジのあちこちで話題に。ニクソン政権下で繰り広げられた「国家vs新聞」の攻防から50年近くたつが、ノスタルジーだけではないのだろう。IT時代、スクープの手法は変わった？　国家の監視もデジタル手段で巧妙になり、報じるリスクが増したようにも感じる。だからこそ、この映画に勇気をもらい、覚悟を新たにしたということだろうか。ジャーナリズムの心意気は変わるまい。

こんなに反響が大きかった試写会は初めてだった。会報（３ページ）だけでなく、ウェブサイトの「取材ノート」にも特別ページを設けた。当時のワシントン特派員や晩年のブラッドリー・インタビュー等々が掲載されている。投稿歓迎です。

（事務局・長谷川和子　hasegawa@jnpc.or.jp）

新しいOB会員

吉原（よしはら）　勇（いさむ）

1964年毎日新聞入社。西部本社代表室長、下野新聞取締役東京支社長など。現在、総合政策研究会理事。

女房の介護もあり退会していましたが、その女房は昨年死去、独居老人になってしまいました。家に引きこもってばかりでは精神的に参るので再入会しました。当クラブには1983年に入会しましたので30年を超えて在籍しています。よろしくお願いします。

ペンス米副大統領　横田基地でスピーチ

「ハロー、ヨコタ」。２月８日、ペンス米副大統領は、米軍横田基地で約2000人（主催者発表）の在日米軍兵士などにそう呼びかけた。兵士への感謝と激励と共に、北朝鮮の脅威への揺るぎない米政府の立場を明確にした。

「北朝鮮へは警戒と決断をもって臨む。昨日、表明した通り、彼らが核・ミサイル開発計画を放棄するまで最大限の圧力をかけていく」

20分弱の演説は、内容よりも演出が優先されたようだ。舞台正面には、嘉手納基地へ暫定配備されている最新鋭のステルス戦闘機Ｆ35Ａが２機置かれ、その間に立つ副大統領の背には星条旗が掲げられた。演説の１時間ほど前から、基地所属のロックバンドがムードを盛り上げる。集まった兵士は高校の全校集会に参加する生徒のようにもみえた。　（事務局・石川洋）

土曜サロン100回記念
シンポジウム開催のお知らせ

メディア界の現役記者とOBが自由に語り合う「土曜サロン」が、この３月で発足以来100回目を迎えます。同サロンは2001年に産経新聞元編集局長の青木彰氏らが提唱、ジャーナリズムが抱える課題や問題点についてテーマを設定し、議論をしてきました。いかなるテーマも、その問題意識は常に「ジャーナリズムはいかにあるべきか」でした。

100回を記念して「これからのジャーナリズム」をテーマに、シンポジウムを開きます。パネリストに評論家の武田徹氏とジャーナリストの津田大介氏を招き、サロン世話人の中江利忠氏（朝日OB）、小田貞夫氏（NHKOB）も加わって議論を深めます。皆さまの参加をお待ちします。

日時：３月31日（土）13：30～16：30
場所：プレスセンター10階ホール（入場無料）
参加希望者はhashiby0417@yahoo.co.jp（橋場）に３月26日（月）までにご連絡ください。

レストラン＊価格は全て税込みです

予約電話　和食 3503-2723　洋食 3503-2766・2731

和食　弥生懐石（3/30まで）

先付：帆立と春野菜のお浸し、粒貝わさび和え　お椀：あいなめくず打ち　造り：三点盛り　焼物：甘鯛柚庵焼き　煮物：鴨ロース煮　揚物：白魚天ぷら　食事：鯛めし　水菓子：季節の果物　グラス冷酒付き（5,400円）　（板長：大井由光）

洋食　季節のおすすめコース（4/28まで）

前菜：コールドビーフのサラダ仕立て　スープ：ハマグリのチャウダー　又は　ヴィシソワーズ　メイン：桜鯛のポワレ　桜海老の押し麦のリゾット　デザート：桜アイス　イチゴ添え　パン、コーヒー付き（3,780円）　ランチ、ディナー（土曜はランチのみ）ともにご利用いただけます。

（シェフ：黒須修一）

春の歓送迎会プランがお得です　4/28まで

料理が洋食８品にお寿司とおそばがついて3,240円のプランです。プラス1,404円で飲み放題にできます。お部屋代込みでお一人6,000円以内になります。社内の集まりなどにご利用ください。お問い合わせはフロアマネジャーまで（03-3503-2724）。

HPの活用を　https://www.jnpc.or.jp/

■会見検索をご利用ください

コラムのネタを探している方。まずはクラブのウェブサイトを検索してみませんか。トップページにあるメニュー【これまでの記者会見】の中にある【会見検索】ページをご活用ください。氏名はもちろん、国別や研究会名などでの検索が可能です。

■２月の動画再生回数トップは（2/22現在）

会見動画で、２月中の再生回数が最も多かったのは、原晋・青山学院大学陸上競技部監督（２月５日）でした。また、話題の「ビットコイン」について、2014年３月19日に野口悠紀雄・早大ファイナンス総合研究所顧問が話した研究会も上位に。

■おすすめ動画

●俳人・金子兜太さん　会見詳録もあります

２月20日に死去した俳人の金子兜太さんは、2010年５月28日にクラブの総会記念講演で話しています。

●南アフリカ新旧大統領　２月15日に大統領に就任したシリル・ラマポーザ氏は副大統領時代の2015年８月25日に、辞任したジェイコブ・ズマ氏は2013年６月４日に会見しています。

■取材ノート　旅の記憶（ウェブ限定のエッセー）

●江口義孝会員「スペイン巡礼の旅」

ニュースパーク　在英ジャーナリスト・小林恭子さん講演会のご案内

ニュースパーク（新聞博物館）が在英ジャーナリストの小林恭子さんを招き、「英国国立公文書館から見える英国社会とメディア」をテーマに下記の通り講演会を開催します。

日時：３月25日（日）14:30～16:00
定員：70人
場所：ニュースパーク
参加希望者はメール（npevent@pressnet.jp）または往復はがき（〒231-8311　横浜市中区日本大通11 日本新聞博物館）で、氏名・電話番号・メールアドレスを記入のうえ、３月20日（火）までにお申し込みください。

2017年報道写真展ラウンジで開催

東京写真記者協会（新聞・通信など33社加盟）は毎年、その年の優れた報道写真に対し協会賞と各部門賞を贈っています。昨年の受賞作約20点を集めた「2017年報道写真展」を３月27日（火）から４月６日（金）までラウンジで開催します。

会員登録変更のお届けを

異動の季節です。会員の入退会には所定の「変更届」を事務局へお届けください。お問い合わせは事務局の村田（電話03-3503-2727　e-mail murata@jnpc.or.jp）まで。役職変更のみの場合もお知らせ願います。

ロッカーの長期利用はご遠慮ください

ロッカーは１日限りのご利用をお願いしています。長期間、荷物を放置しているケースがあるようです。限られたスペースを会員の皆さんで有効にご利用いただくため、長期利用はご遠慮ください。

＜訃報＞

本多当一郎会員（日本テレビ出身、83歳）が２月４日に、山田哲夫会員（中日新聞社元取締役・論説担当、70歳）が同20日に、死去されました。山田さんは2012年７月から15年５月までクラブの理事を務めました。ご冥福をお祈りいたします。

今後の行事予定（3/5現在）

22㊍	18：00～19：35　10階ホール 試写会　「私はあなたのニグロではない」
26㊊	15：00～16：30　10階ホール 著者と語る『評伝　石牟礼道子―渚に立つひと―』 米本浩二毎日新聞西部本社記者
	18：30～20：00　10階ホール 研究会「被害者報道を考える」② 武内大徳弁護士

クラブの電話　ダイヤルイン

●和食レストラン（9階）……☎3503-2723
●洋食レストラン（10階）……☎3503-2766
●貸室予約、宴会打ち合わせ‥☎3503-2724
●受　付……☎3503-2721
●会員事務……☎3503-2727
●経　理……☎3503-2728
●クラブ行事への申し込み……☎3503-2722
●会見申し込みアドレス…kaiken@jnpc.or.jp

会員現況

●法人会員：133社　●基本会員：744人　●個人会員：1,252人
●法人・個人賛助会員：61社・135人　●特別賛助会員：106人
●名誉・功労会員：11人　●学生会員：138人　計：194社・2,386人

会報委員会

委員長＝小林　毅
委　員＝梅原　季哉　大寺　廣幸　勝沼　直子　草間　嘉幸　小池　敏夫　河野　博子　仙石　伸也　高橋　雅哉　長友佐波子　吉岡　政道
（事務局：本庄五月　青山幹史）
☎03-3503-2754　FAX 03-3503-7271

写真回廊

冠雪した富士山と冬の花火が「共演」＝山梨県富士河口湖町　1月27日

撮影：桐山（きりやま）　弘太（こうた）（産経新聞社写真報道局）

霊峰に挑む表現者

写真を見て、「絵に描いたような」と言うのは不適切なのだろうか。だが、山梨県・河口湖での冬の花火大会を撮ったこの写真は、ついそう口にしたくなるほど見事な構図の美しい作品である。

桐山カメラマンは、富士山が月明りに照らされる日を狙ったものの、雲や花火の煙で山頂部が覆われてしまうなど、なかなか、満足できる一枚が撮れなかったそうだ。この作品にたどり着くまで4回も湖畔に通ったと、記事にはある。

そういえば、葛飾北斎の富嶽三十六景を見ると、大きな波の向こうに富士山が見える「神奈川沖浪裏」や、丸い桶の枠の中に小さな姿を見る「尾州不二見原」など構図が凝りに凝っている。この山には、表現者を刺激してやまない何かがある。

私たちは、昔から富士山が大好きだ。日本一の高さを誇るからだけでなく、その優美な姿に見とれ、霊峰としてあがめる。一方で、銭湯の絵にも使われてきたことを考えると、案外、〝安売り〟されてもいる。

今年2月、山梨、静岡両県は、混雑を緩和するため、ピーク時の登山者数の抑制を目指す案を「富士山世界文化遺産学術委員会」に示した。このままでは、自然環境や神聖さに影響を与えかねないからだそうだ。

近くで見る山も、美しくあってほしい。

（秦野　るり子）